

「おかしい」と認識できる感覚

～社会を動かした判断と姿勢、その後の粘り強い取材～

松原葉子（オルガン奏者, 富山市）

読売新聞社会部 渡辺晋 様

「これが、本当に行われているんだったら、大問題だろう。」  
読売新聞社会部の総力戦によって世に問われた「東京医科大学の不正入試問題」の取材・報道。その要は、渡辺デスクの、この直感的な一言に表されている！  
当たり前のことかもしれませんが、率直にまず、そう思いました。

というのも、授業の終盤、二度見ならぬ、二度、三度聞き直してしまったシーンがあるのです。丸木一成先生が「医学部入試で女子差別があるというのは、医療取材をしていた時には常識だった」。さらりとそう仰って…。えっ？

“常識” だった！？丸木先生の一言に引っかけ、目が点になりました。

医学界に慣れている人であれば、「当然だよ」と調べなかつたらうと。

「不正入試問題」の事実。それは医学部で横行していた暗黙裡の“医学界の常識” だったのでしょか。だとすれば、いくら情報を入手していても、それを「当然だよ」と捉えるに留まっている限り、不正の実態は暴かれない。

ダブルパンチを受けたような衝撃にクラクラし、同時に、この画期的な取材・報道を成し遂げてくださった渡辺デスクをはじめ取材班の皆さんに、心からの拍手を送らずにはいられませんでした。

日頃、私もお世話になっている女性医師の言葉とアクションを思い起こします。医学部入試での女性の合格率が明らかに低い現状に疑問を抱き、ゲートコントロールされているのではないかと、いち早く指摘していらしたお一人が、  
<資料6>の東京医大一律減点 離職の恐れ女子を減点 の記事中にも紹介されている「日本女性医療者連合」の理事で産婦人科医の（現在は富山県議会議員でもあられる）種部恭子先生。

国や医師会などの会議で「おかしい」と声を上げて「そんな不正があるはずはない」と一蹴されていたとのこと。メディアにも疑問をぶつけても、事実

が明るみに出なければニュースにはならず…。種部先生が、『女性医師を「増やさない」というガラスの天井～医師・医学生的女性比率に関する分析～』という論考を発売されていたのは2017年8月。

「東京医科大学の不正入試問題」の報道は、それから1年後…。きっかけは、文科省局長の受託収賄容疑で検察の捜査が入ったこと。しかし、その取材過程において、重要な証言を聞き逃さず、直感的に「おかしい」とキャッチできる新聞社の判断と姿勢がなければ、その後の粘り強い取材と「不正入試問題」報道には繋がってはいなかったのではないのでしょうか。

そこが、今回の授業を通して感じた、取材・報道の一番強烈で、根本的な気づきでした。

取材者の熱意がピンピン伝わってくる一連の記事。膨大な資料が物語る事実の背景に横たわっている根本的な社会問題の一つひとつを、私自身に与えられた大きな宿題として受け取り直し、考え続けてゆきたいと思います。貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。